

# 日本における看護婦養成の開始とアメリカ女性宣教師の役割

— リード・ツルー・リチャーズの活動を中心にして —

平尾 真智子<sup>1)</sup>

## 要 旨

1880年代の日本で看護婦養成に関与した3人のアメリカ女性宣教師リード、ツルー、リチャーズの活動内容を分析し、彼女たちが果たした役割と意義を看護婦養成史の観点から考察する。研究資料として宣教師の本国への書簡、伝道局機関誌に掲載された報告文、伝道局年報、などの史料を用いる。

結果として、彼女たちの養成はわが国で最初のもので、看護婦養成の必要性が認識され、卒業生の活動には成果がみられるが、広く日本の土壌に受容されたものとはならなかった。要因として宣教師の側に、看護婦養成は宣教活動の主目的ではなかったこと、日本側の要因として医療は日本人自身が主導するという明治政府の方針があげられる。医師や産婆とは異なり看護婦の場合は、政府による制度がまだ未着手であったため宣教師の関与する余地が残されていた。しかし数年後の1890年には、わが国の本格的で組織的な養成である日本赤十字社による養成が開始された。彼らの活動は先駆的ではあったが日本には定着しなかった。

キーワード：看護史、看護教育史、日米看護交流史

## はじめに

日本における看護婦養成史上最初に開校した3つの看護婦養成所にはいずれもアメリカの女性宣教師たちがその教育に関与している。本稿では19世紀後半にわが国で宣教活動を行っていたプロテスタント宣教会とその宣教会に所属する女性宣教師<sup>1)</sup>のうち、わが国最初の看護婦養成に関与した米国長老教会のリード、ツルー及びアメリカン・ボードのリチャーズの活動内容を分析することで、彼女たちの果たした役割と意義を看護婦養成史の観点から明らかにしたい。

この分野の先行研究として次のようなものがある。看護史の代表的な通史の一つである杉田暉道他の『看護史』<sup>2)</sup>のなかに宣教師による養成活動がごく簡単にとりあげられており、また、亀山美知子の『近代日本看護史Ⅲ（宗教と看護）』<sup>3)</sup>にはキリスト教と看護の項目があり、宣教師の活動が

概説的に取り上げられている。個別の宣教師の活動としては有志共立東京病院でのリードについては平尾真智子・坪井良子らの研究がある<sup>4)</sup>。また桜井女学校のツルーについては高田みつ子や亀山美知子らの研究がある<sup>5)</sup>。京都看病婦学校のリチャーズについては小野尚香らの研究がある<sup>6)</sup>。一方キリスト教女性宣教師をテーマとした社会史的考察としては小檜山ルイの『アメリカ婦人宣教師』<sup>7)</sup>がある。

しかし、看護婦養成史の観点からその導入期におけるアメリカ女性宣教師の活動の実態とその役割を総合的に解明し考察したものはない。本稿では宣教師の本国への書簡、婦人伝道局機関誌に掲載された報告文、伝道局年報等の基礎史料をはじめ、自伝、伝記、学校史などの関連資料をもとに上記の課題について考察する。

(所 属)

1) 山梨県立看護大学

(専攻分野)

成人看護学

## I. 現地での要請に協力した米国長老教会のリード—有志共立東京病院看護婦教育所の場合

有志共立東京病院は芝区にある慈善病院で、イギリスのセント・トマス病院医学校に留学して帰国した高木兼寛医師らによって1882（明治15）年に設立された。<sup>8)</sup> この病院の患者たちを第一啓蒙小学校の生徒たちは1883（明治16）年から毎週土曜日に果物と花を持って慰問を行っていた。同校は米国長老教会ニューヨーク婦人伝道局のミス・ヤングマンが1878年に築地居留地に創設した貧しい子供たちのための学校である。また同教会のフィラデルフィア婦人伝道局の宣教師夫人らはフラワー・アンド・フルーツ・ミッションと称して1884（明治17）年より東京の慈善病院の慰問を行っており、病院と米国長老教会ジャパン・ミッションとは慰問を通じた関係がもたれていた。<sup>9)</sup>

ミス・リード（Mary E. Reade）は1884年10月17日から有志共立東京病院で週に2日、日本人看護婦に衛生学と看護の知識を教えるようになった。彼女が同病院と関係をもったのは高木医師と米国長老教会の宣教師ヘボンが親交のあったためと考えられているが、慈善病院への友愛訪問をしている米国長老教会の女性宣教師のなかにリードが含まれていた可能性もある。<sup>10)</sup>

ミス・リードは米国長老教会ニューヨーク婦人伝道局所属の女性宣教師で、1881年10月に来日し、築地居留地のグラハム・セミナリー（新栄女学校）<sup>11)</sup>でI. A. リート、スミス、リナ・リートとともに仕事について。新栄女学校は日曜学校運動がさかんで、リードはここでアシスタントをしながら、1日2時間教え日曜学校も担当していた。1883年、リードは築地の新栄女学校からフィラデルフィア婦人伝道局の運営のもとにあった番町の桜井女学校に移り、ミセス・ツルーが帰米している間ミス・デイビスを補佐して教育にあたった。

1885年1月7日、有志共立東京病院の高木は米国長老教会ジャパン・ミッションとの間にリードに関する2年間の4項目の契約をとりかわしている。この4つの項目とは、2年間無給で病院に勤務し、勤務時間は1日4時間であること、院内のどの部署にも入れること、使用人2人と部屋2つ

と生活諸雑費を供すること、院内でキリスト教の布教ができること、となっている。<sup>12)</sup> この契約でリードは病院内におけるキリスト教の伝道も許されることになり、番町から芝に移り、看護婦たちと病院の敷地内の建物と一緒に住むことになった。高木はイギリスのセント・トマス病院医学校に留学した経験から、病院におけるキリスト教の布教について「英國に於ける總ての思想、即ち宗教を基礎とせる施設に直接接して成程是れでなければならぬと云ふ心持が十分起こったのであります」と述べている。<sup>13)</sup> セント・トマス病院はキリスト教関係の宗教団体の運営する慈善病院で、高木はこの病院にならって日本にも慈善病院を設立したいという思いをもったものと思われる。

1885年4月、上流婦人の組織である婦人慈善会の大山捨松ら6名は高木の看護婦養成を支援するために「看護婦教育所設立の主旨」、「看護婦教育所設置案」を発表し、同年7月には義援金を病院に寄付し、看護婦教育所が設けられることになった。教育所の建築は7月に着工され、1886年1月に完成している。<sup>14)</sup> しかし、この看護婦教育所が東京府に提出した私立学校設立の申請書はこれまでのところ確認できない。

リードの指導した看護婦たちは病院の貧しい人たちの看護と裕福な階級の派出看護の仕事をしてきた。<sup>15)</sup> リードは本国アメリカの長老教会婦人伝道局の機関誌“Woman's Work for Woman and Our Mission Field”<sup>16)</sup>に日本での自分の看護婦訓練の活動を報告している。それによると、リードの接した日本人看護婦に関するものとしては、病院には30人の看護婦が勤務し、彼女たちは今では看護婦と呼ばれることに誇りをもっていること、病院にとっても愛着をもっていて派遣されるときは喜んででかけ、再び喜んで戻って来ていること、以前にはあった看護婦たちの間のけんかやしつとや盗みがなくなってきたこと、訓練している看護婦は忘れやすくのろいなどの難点があること、などの記述がある。<sup>17)</sup>

またリードの女性と職業に対する考えを示すものとして、日本は看護の仕事のために女性を訓練することの重要性に気づきつつあること、学校が

開かれて以来多くの病院の診療所員からの訪問を受けており、すべての階層がこの種の仕事に広い関心を払い始めてきていると報告している。また政府の医学試験がこの病院で行われたが、志願者は彼ら自身の教師によっては試験されなかったこと、日本では外国人の女性医師は医者としては他の分野におけるほど役立つことはできないが教育の部門では十分働くことができること、十分な医学教育を受けた日本人女性のための広く重要な領域があることを考えていると報告している<sup>18)</sup>。

有志共立東京病院は明治17年、政府の医術開業試験の会場となっており、リードの報告と一致している。<sup>19)</sup> 1875年頃のアメリカでは、医師としての開業は各州の試験委員会の試験制度によるか、優良校を指定しその学校の卒業証明によって証明書所持者に開業の資格を与えていた。医学校や看護学校の試験は実技を伴うため学生の卒業を認定する試験は実技を指導した教員によって行われるのがふつうである。<sup>20)</sup> わが国の当時の医術開業試験は志願者に対して政府が行う一斉試験のため、指導した教員が試験を担当する形式はとっていない。リードのこの記述から彼女自身、医学校または看護学校の教育・試験を体験していることが予想される。

リードは病院との契約の2年間（1885年1月から1887年1月まで）を越えてもしばらくは病院での仕事を継続していた。リードに教えを受けた日本人看護婦は、同校一期生で、大石テル、吉岡ヨウ、鈴木キク、近藤カツ、板谷コトの5名で、1888年2月1日に卒業している。初期の卒業生には士族の娘が多い。

リードはその後、新栄女学校に戻り本来の女子教育活動に従事し、生徒に音楽を教えている。1888年の長老教会海外伝道局の年報には、グラハム・セミナリーはミス・リート、ミス・ビゲロー、ミス・リードの監督下にあると報告されている。<sup>21)</sup> リードは1888（明治20）年頃の新栄女学校の生徒と教師約100名と一緒に記念写真に校長のビゲローの隣に並んで写っている。<sup>22)</sup> 有志共立東京病院での契約終了後、リードに看護教師としての相応の資格があると同僚宣教師たちが認めていれば、

ほぼ同じ時期に米国長老教会婦人伝道局のツルーが企画した桜井女学校の看護婦養成所に転任することが考えられる。それがなかったのはリードの資格が足りないか、同僚宣教師との関係が悪かったかなどの理由が考えられる。<sup>23)</sup> 新栄女学校・桜井女学校は後に女子学院となるが、女子学院の歴史において、ミス・リードが記録されているのは、前述の写真と桜井女学校看護婦養成所拡張募金委員に名前が載るのみで、まったく埋もれた存在の女性宣教師となっている。彼女が新栄女学校と桜井女学校で教育を行った期間は合わせて4年6カ月となる。リードは1888年、長老教会に辞任届を提出し、5月19日に帰国した。<sup>24)</sup>

1887年4月1日、有志共立東京病院は資金的に皇后の援助を受けることになり、名称も東京慈恵医院と改称された。皇室の庇護を受けることになったのである。京都看護婦学校のリチャーズはアメリカ帰国後に著した「日本における看護の発展」のなかで、皇后自身の援助のもとに2番目のもっと重要な学校が開設されたと述べているが、これは名称が改称されてからの有志共立東京病院看護婦教育所のことと思われる。<sup>25)</sup> リードとの契約期間が過ぎ、東京慈恵医院と改称してまもない1887年7月、高木は日本人の看護婦指導者養成のため日本人看護婦2名をイギリスのセント・トマス病院へ留学させている。<sup>26)</sup>

有志共立東京病院による看護婦養成はわが国で最初のものであり、そしてその系譜（後身に当たる施設の活動）は現在まで続いている。リードの人物像についてはニューヨーク婦人伝道局所属の独身女性宣教師であること以外には在日中の写真3枚が残されているのみで、生没年、出身地、出身校は不明であり自伝、伝記もない。新栄女学校で音楽の教師をしていることから、本国アメリカで女子中等教育は受けていたと思われるが、看護婦の訓練をどれほど受けていたかはわからない。当時アメリカでも正規の看護婦養成学校は10数校しかなく、施設によっては10週間ほどの短期コースもあり、このようなコースで学んだことも考えられる。<sup>27)</sup> リードの行った看護婦養成は派遣された日本の現地からの要請によるもので、宣教師の

側から企画・運営されたものではなかったため、一時的で、組織だったものではなかったが、看護婦を訓練する必要性は認識され、リードの後は松浦里が看護婦取締心得となりあとを継いだ。

高木はこの学校で展開されたリードの教育にたいしては大変感謝していただしく、明治36年に、「リード嬢に依りて基督教主義を病院内に鼓吹し、今漸く本願寺に近かんとす、然かも其成績の尤も良好なりしハ基督教時代にして、今にして秀抜なる看護婦として社会に信用を有せるハ、實にリード嬢時代のもののみなり」と述べている。<sup>28)</sup>

## II. 独力で計画を推進した米国長老教会のツルー — 桜井女学校看護婦養成所の場合

ツルー夫人 (Maria T. True, 1840-1896) が日本に看護婦養成所を設立しようと強く思い立った理由には、友人のリディア・バラの死があった。リディア・ベントンは婦人一致海外伝道局から日本に派遣された女性宣教師であったが、1875年にジョン・バラと再婚、同年、夫とともに長老派の伝道局に所属した。ツルーとバラは1870年代初頭、婦人一致海外伝道局の横浜ミッション時代からの同僚であった。バラ夫人は病弱で、病気になったときに、看護の傍ら神の道を説くクリスチャンの看護婦が存在すればそれも伝道の一つの方法であると考え、帰米し1884年1月7日から12日までのフィラデルフィアの婦人伝道局で開かれた祈禱週間に参加し、祈禱やスピーチを行って慈善家から寄付金を集める活動をしていた。その彼女は1月13日に突然死亡した。彼女は、前日の祈禱週間最終日に、日本の看護婦養成のための学校と病院を設立する件について賛同を呼びかけていた。ツルー自身、アメリカに休養で帰国しているときにこの報に接し、その遺志を成就しようという希望をもって日本に帰ってきた。ツルー夫人がバラの遺志を継ぐことになったのは当然の成り行きだった。<sup>29)</sup>

ツルーはアメリカン・ミッション・ホームの宣教師で、1874年に中国より来日し、横浜で孤児、混血児の保護と収容、教育を行った。1876年、米国長老教会に加入。フィラデルフィア婦人伝道局

に所属し、原女学校の教師となる。1878年、原女学校の閉校に伴い生徒とともに新栄女学校に移った。1879年、ヘボンの推薦により金沢へ英語教師として赴任するが、1年後に再び新栄女学校に戻り、1881年、桜井女学校が米国長老教会の管理下になると、ツルーは新栄女学校から矢嶋楯子、ミス・デイビスを伴って桜井女学校に移った。

ツルーは1883-84年、休養のため帰米する。この期間に日本における看護婦養成所設立を要望していた同僚のバラ夫人の死に遭遇した。彼女は帰国先の婦人伝道局で日本での活動に対する協力を呼びかける演説を行い、教育に関わる女医の手配をし、看護関係の図書を準備している。1884年にミリケンを伴い再来日する。桜井女学校に保母養成課程設立に際しミリケンを援助する。<sup>30)</sup> 1886年11月に桜井女学校に2年課程の看護婦養成所を開設したのである。

ツルーによると看護学校の目的は(1)家庭看護婦の養成、(2)女性一般に病人食を教授する、(3)通常の看護婦になれない人に実際的な訓練を施すの3点にあった。<sup>31)</sup> これらの目的のうち2つまでは一般の女子教育機関で教授する内容ともいえる。事実、ツルーは病院での実習よりも「家庭での世話の訓練」の方が大事であると考えていた。ツルーの描いていたのは病院で働く職業看護婦よりも家庭での看護を担当するホームナース(家庭看護婦)または家庭で一家の健康を担う主婦の機能の一部としての家庭看護であったと思われる。

同年代のリチャーズによると、アメリカの田舎では病人のケアは「生まれながらの看護婦」(born nurse)によって行われていた。心優しく人に尽くしたことによってそう呼ばれていた婦人たちは年長の婦人や家庭医の指導のもとに実際的な訓練を積んでいた。このような婦人は村や地域に必ずいて、今日の地域看護婦のように頼みにいつでも応じてくれた。彼女たちは無報酬で適切な訓練を受ければ理想的な看護婦になれる資質をもって、という<sup>32)</sup>。ツルーのイメージしていたのは、ツルーの田舎にもたぶんいたであろうと思われる born nurse に衛生学上の知識を加えた程度の家庭看護婦ではないだろうか。1900年にはまだアメリ

カでは病院看護ではなく、ホームケアが看護の主流であった。<sup>33)</sup> また1900年のアメリカでは、正規の教育を受けて仕事をしている看護婦は住民6000人に1人の割合であった。<sup>34)</sup> 彼女は看護婦の訓練には患者のいる病院ではなくベッドの備え付けられた施設を要望している。ツルーが考えていたのはホームナースであり、純然たる職業看護婦の養成という点においては目的意識の点で弱いものをもっていった。<sup>35)</sup> ツルーに教育を受けた大関和や鈴木雅は病院での看護よりも、家庭に看護婦を派遣する派出看護婦会を運営したり、派出看護婦会での看護婦養成を手がけている。

桜井女学校では実習病院を持たなかったため、実習は帝国大学医科大学付属病院に委託して行った。帝国大学での看護教師は英国人アグネス・ベッチ<sup>36)</sup>であった。同じ長老派の女性宣教師で、1887年1月に有志共立東京病院での2年間の看護婦監督としての契約が終了したミス・リードは新栄女学校に戻り、この桜井女学校の看護婦養成所の教員として迎えられていない。<sup>37)</sup>

養成所開設当時の様子を桜井女学校卒業生の田村えいは次のように回想している。ミセス・ツルーが『看護婦心得』という英書を持ってきて「秋にはアメリカから女医が来るから準備をするようにこの本を訳して皆に読んでやりなさい」と言われた。それは内科実習の本で、イルリガートルとか浣腸とか、便器の扱い方などが書いてあるが、説明はできるけれども実際にどうやるかがわからずに本当に困った。「私の家など、かかりつけの医者といえば大抵漢方医ですから薬の名前からして見当がつかいません。検温器など見たこともありません。それを説明するのですから困りました。矢島さんはやり方がわからなくなると何でもミセス・ツルーにところへ聞きに行ったのは良いのですが、ある時病人の差し込み便器の使い方がわからなくてミセス・ツルーのところに押しかけていって『先生ちょっとやってみてくれませんか』と言ったので、ミセス・ツルーもこれには本当に困ってしまったそうです」と述べている。<sup>38)</sup>

看護婦養成所の1回生は、鈴木雅、大関和、広瀬うめ、桜川里以、小池たみ、池田子尾の6人で、

そのうち鈴木はミッションスクール、大関は英語塾、佐野は女子師範学校を卒業後入学している。1回生のなかからは後に東京看護婦会会頭となり、『実地看護法』を著し看護界の重鎮となる大関和やわが国で最初に派出看護婦会をつくった鈴木雅らが育っている。大関和はツルーの看護婦養成の講義内容をふりかえり、「今日で申す高級看護婦とでもいいですか、見識といい、学力といい、精神といい、信仰力といい頗る高級のものなりました」と回想している。<sup>39)</sup>

同養成所は本国のフィラデルフィア婦人伝道局の認可を得て募金活動が行われその資金を元にミセス・ツルーを中心に企画・運営されたが、米国長老教会本部の許可を得られず、2回生までで閉鎖となっている。<sup>40)</sup> 長老教会の宣教医ヘボンは次のような見解を示した。看護学校は、5人の看護学生を取り、その研修用に20床の病院をつくれれば、少なくとも1万ドルの初期投資と4000ドルから5000ドルの年間運営費が必要であり、金がかかりすぎる企画であった。しかも、日本では政府が医学校も病院も十分に整備しており、「日本人医師は嫉妬深い」ので「この国に宣教医は要らない」のであった。看護婦とて必要となれば、日本人が自分たちで教育するだろうとヘボンは見込んでいた。しかも「日本はまだ訓練を積んだ看護婦を使うような文明の域に達していない」というのがヘボンの考えだった。<sup>41)</sup> さらにツルーの報告する看護学校と慈善病院でのリードの看護婦養成の報告は本国においても混乱して伝えられていた。<sup>42)</sup>

ツルーは長老教会の女性宣教師の中心的存在で日本滞在も長い。保母や看護婦の養成と平行して1885年から1889年にかけて八王子女学校、藤沢英語学校、高田女学校、宇都宮女学校、女子独立学校などを援助している。伝記として田村直臣著『ツルー夫人の伝』(明治32年)がある。ツルー自身は本国アメリカでの小学校の教師の経験のみで専門的な看護婦の資格・経験はもっていない。ツルーはニューヨーク女子伝道学校の卒業である。ツルーの女子教育にける情熱はあつく、女子大学の構想も持っていた。また、女性の健康にも関心を持ち、1893年サナトリウムとしての衛生園を

創設した。衛生園は長老教会の資金ではなくモリス夫人の個人的な寄付金により1893年に完成した。その目的は、ツルーの手紙から、家庭で看護できる看護婦の養成と日本女性が静養できる場所を兼ねて建設されたものであったと考えられる。1895年の桜井女学校看護婦養成所拡張募金活動委員にはモリス、リード、トンプソン、ツルーの諸夫人、及びミリケン女史並びに、岡見、渡瀬、鈴木、田村、種田の諸夫人の名があり、この時点でリードとツルーは一緒に活動をしていることが確認できる。<sup>43)</sup> ツルーはここで1896年に亡くなったため、ツルーのあとはツルーの教え子で女医の岡見京子が看護婦養成所の後をついだ。

1898年2月11日の基督教新聞には、衛生園と称する婦人科病院に看護婦学校も付設されていると載っている。衛生園の看護婦養成所は1897年から女子学院の分教場と寄宿舎として活用する旨の変更届が提出される1906年まで8年間養成を行った。桜井女学校看護婦養成所と衛生園看護婦養成所で養成された看護婦数は『女子学院五十年史』によると20余名となっている。桜井女学校の2回生までで12名、衛生園の1回生だけで8名でこれだけでも20名となり、衛生園での養成数は数名であったと考えられる。<sup>44)</sup>

ツルーは女子の一般教育に加え、職業教育としての保母、看護婦の養成を行った。このうち女子教育の領域においては今日に至るまでツルーの関与した学校の系譜が継続している。しかし職業教育のうち看護婦養成は本部の協力が得られずにツルー個人の努力で行われたため基盤が弱くやがて廃止される結果となる。

なお東京府知事への看護婦養成の学科増設の申請書はこれまた見いだすことができない。

### Ⅲ. 本格的な養成事業に教師として参加したアメリカン・ボードのリチャーズ

#### —京都看病婦学校の場合

ミス・リチャーズ (Linda Richards, 1841-1930) はアメリカン・ボード (会衆派) の求めにより日本で看護婦を養成するため1886年来日、ただちに新島襄の創始した京都看病婦学校、同志社病院で

医師ベリーとともに看護婦養成に携わった。京都看病婦学校は1886 (明治19) 年に開設された。学校設立に先立ち、大日本私立衛生会京都支部でベリー医師の演説があり、学校設立のための寄付が募られている。<sup>45)</sup> 1887年7月23日には京都府知事北垣国道に私立看病婦学校開設伺を提出し、同8月11日には学第22号によって認可書が下付されている。学校種別では私立の各種学校 (看病) で、同校は文部省年報に登録された各種学校の看護婦学校第1号である。

リチャーズはニューイングランド婦人子供病院看護婦学校の卒業生で米国最初の有資格看護婦である。来日前はボストン市立病院の看護婦監督の要職にあった。ナイチンゲールにも面会しており、イギリスの病院で看護の勉強をした経歴がある。このような経歴の女性が日本における看護婦養成の黎明期に来日し指導的役割を果たしたことは注目に値する。

第1回生は伊藤テツ、大島スミ、中タカ、安藤小松、及び氏名不詳1名の5人であった。このうち2人はミッションスクールの卒業生で英語の学力があり、うちの1人は3年間女史の通訳として活躍した。残りの3名は既婚者であった。リチャーズは日本人女性の生徒の素質について「驚くべき忍耐力」をあげている。また明るく礼儀正しく、お手本どおりのことができるので、実習の効果はすぐ現れた、と記述している。また日本の看護婦は婦人や子供の世話をすることには優れていたが男性に対して指示するとき、自分たちの職業上の責任を行使するのは困難なようであったとしている。<sup>46)</sup> リチャーズは生徒のユニフォームを自ら裁断し作成した。看護婦の訓練期間中、彼女たちを個人看護に出すことにし、看護婦たちが収入を得られるように配慮した。来日2年目からは日本の生活にも慣れ日曜学校などの伝道活動を開始している。京都看病婦学校では1889年から成績により正科生と別科生に分け、1890年から正科生には病院および看病婦取締上の訓練をしている。<sup>47)</sup>

京都看病婦学校は、1896年、アメリカン・ボードの経営から同校の教師であり、かつ医師の佐伯理一郎個人の経営に移管された。アメリカン・ボ

ードは1895年に同志社社員と交渉をもち、1896年、同志社社員会は学校・病院を廃止し、その善後策は学校・病院の委員において定めるとした。1897年より京都看病婦学校・同志社病院は佐伯理一郎個人の管理となったため、アメリカン・ボードの管理下においてアメリカから派遣された看護の専門教育を受けた看護教師たちによる教育が行われたのは創立から10年の期間である。<sup>48)</sup>

1890年、リチャーズは帰国したがその後にはスマイス、フレザーといった看護教師が来日し教育が継続された。リチャーズはその後アメリカ各州の病院の総婦長や訓練学校監督を歴任し、アメリカの看護界で活躍した。帰国後は創刊されたばかりの本国の代表的な看護雑誌である“American Journal of Nursing”に「日本における看護の発展」を寄稿した(1902年)。<sup>49)</sup> 国際看護婦協会書記のラビニア・ドッグが著した“History of Nursing”第4巻(1912年刊全4巻)の日本の事項に関する資料を提出し、日本の看護の状況を世界に紹介している。<sup>50)</sup> 帰国後も日本の看護学校のことを気にかけて、アメリカン・ボードとの関係を絶たれた後も京都看病婦学校の佐伯理一郎を支援している。1911年に自伝“REMINISCENCES OF LINDA RICHARDS-AMERICA'S FIRST TRAINED NURSE”を出版した。<sup>51)</sup>

京都看病婦学校は1951年まで継続した。初期の卒業生からは2回生の不破ゆうが京都帝国大学医科大学付属医院の取締に、6回生の石井辰樹は岡山孤児院での看護・福祉に活躍し、<sup>52)</sup> 7回生の田中定はわが国ではじめて看護婦として伝染病看護の本を著し<sup>53)</sup>、8回生の成瀬四寿は3代目校長のフレザーの講義資料を翻訳し『実用看護法』として出版するなどの活躍をしている。<sup>54)</sup> イギリスのナイチンゲール博物館では世界にナイチンゲール方式による養成システムが普及していく様子を世界地図に表しているが、日本では“Kyoto 1885”と記されている。

#### おわりに

アメリカのプロテスタント女性宣教師はわが国における女子教育の創始者として活躍し、同様に

女子の職業教育の領域である看護婦養成にも先鞭をつけ先駆者としての活動を行った。これらの女性宣教師の来日の背景には、19世紀アメリカの東アジアへの関心があげられる。それは最初は商取引、次にキリスト教伝道を目的としていた。これらはともに私的事業である。貿易のピークが終わろうとする1830年代のアメリカは東アジアにおける最初の伝道拠点を中国にもち、以後東アジアは巨大な伝道地として常にアメリカ人の宗教的情熱の対象となった。

キリスト教の海外伝道の基本的な方法は、神の言葉を述べ伝え、現地の人々による教会をつくることであった。そこから導き出される伝道の最も正当な事業は1. 聖書の翻訳、2. 説教、3. 現地人牧師の養成、即ち、男子普通一般教育および神学教育である。これ以外の慈善・社会事業、教育事業、医療事業、家庭訪問等の活動は現地の人々との接点をつくるための補助的事业に位置づけられる。19世紀アメリカにおいて女性は神学教育から排除されており、牧師となることはできなかった。神学教育を受けていない女性宣教師は、伝道の正当事業である翻訳、説教、牧師の養成等の分野で主体的に活躍することはできない。彼女たちの主たる任務は、既婚の場合には、異国の地でクリスチャン・ホームを維持することであり、独身の場合には、伝道の機会をつくることに結びつくあらゆる活動を試みることであり、つまり、専ら文明伝播的事业にかかわることであった<sup>55)</sup>。

本稿で取り上げたリード、ツルー、リチャーズはプロテスタントの女性宣教師で、彼らが日本で行った教育的な事業はキリスト教伝道事業においては補助的な文明伝播事業の一つに位置づけられる。アメリカ女性宣教師が直接看護婦養成にかかわる1880年代はわが国におけるプロテスタント宣教師の活動の最盛期に相当している。<sup>56)</sup>

これら1880年代の女性宣教師たちの看護婦養成に関する活動は、わが国看護婦養成史上最初のものであることに意義がある。しかしこれら女性宣教師たちによる看護婦養成は一般的な女子教育に比べて広く日本の土壌に受容された形での養成とはならなかった。

その理由として宣教師側につきのような理由があったことが影響している。

(1)米国長老教会のリードとツルーの来日の主目的は女子教育であり、看護婦養成ではなかったこと、(2)米国長老教会の宣教医で日本滞在の長いヘボンが、明治政府の医療政策を察知し、看護婦養成に反対意見をもっていたこと、(3)米国長老教会内部で本国の婦人伝道局の許可は得られたが、本部海外伝道局の理解が得られないなど組織のなかでの統一した行動がとれなかったこと、(4)アメリカン・ボードが同志社病院・看護婦学校の経営から手を引き財政的な支援を打ち切られたこと、(5)看護婦養成が純然たる職業教育ではなくキリスト教の布教活動を伴っていたこと、などがあげられる。しかし、これら女性宣教師の先駆的な活動からわが国に看護婦の訓練の必要性が認識されたこと、宣教師が直接関わった卒業生のなかからはその後の看護界のリーダーとなる人物が育っていることは注目されなければならない。

つぎに日本側の理由としては、国家(明治政府)の医療方針がある。明治政府の医療方針はあくまで自国の医師による西洋医学の導入及び医療とその教育の推進であった。東アジア地域における宣教師の活動で日本において宣教師が医療から排除されたのは、明治政府の方針の貫徹の結果であった。1899年までは外国人の住居は居留地に限定されていたし、医療はその教育も実践もいち早く日本人自身が主導する分野として特定されたからである。日本で宣教医が活躍しえたのは幕末・維新时期の一時期である。<sup>57)</sup> 明治政府が国家としての体制を作り上げる際に、明治7年に制定された「医制」に規定されているように、医療関係者ではまず、医師の資格・教育制度を、次には産婆の資格・教育制度を創設している。<sup>58)</sup> これらは国家による専門職の資格・教育制度の着手であり、キリスト教宣教師の関与は皆無である。それに対し看護婦の養成は、教育における女子教育の分野と同様に、国家による着手がまだなされていない分野であり、医療における未着手の分野であったため、逆にキリスト教宣教師が関与する余地が残されていたと考えられる。

わが国で最初の看護婦養成機関である有志共立東京病院の場合においても、キリスト教宣教師が関与したのは明治17年から20年までで、病院経営が皇室の庇護を受け安定するようになると、日本人看護婦をイギリスに留学させる計画が立てられるようになる。ツルーの桜井女学校の場合にも女子教育はさかんとなるが、看護婦養成はミッションの方針として行わない決定が下されている。京都看病婦学校では10年間にわたり専門的な教育が行われてきたがアメリカン・ボードによる財政的支援がなくなるとたちまち経営の危機に陥り、市や府、国といった公的な機関からの援助手段は講じられることなく、民間の医師個人の経営にまかされている。わが国における本格的で組織的な看護婦養成は、1890(明治23)年に創設された日本赤十字社によるもので1890年代に入ってからである。

わが国の看護婦養成史上最初の3校が、京都看病婦学校を除いていずれも正規の学校としての申請手続きをとったという証明が得られないことは教育施設としての基盤の弱さを示すとも考えられ、また学校としての申請をした京都看病婦学校が「各種学校」という枠組みのなかで位置づけられたことはその後のわが国の看護婦養成の大部分が各種学校の方向をたどることの端緒となったように思われる。<sup>59)</sup> また最初の入学生をみると桜井女学校や京都看病婦学校ではミッションスクールを卒業した者が入学生となっており、宣教師による看護婦養成は女子の職業教育でも高いレベルにあり、当時のわが国の女子教育の普及状況からは特殊なものであったとも考えられる。

宣教師による看護婦養成が成功するのは、わが国ではむしろ宣教活動の停滞期に入る1920年代になってからで、米国聖公会の宣教医トイスラーの起案によるものである。<sup>60)</sup> 聖路加病院は宣教師の経営する病院であり、医師は本国レベルの質の高い看護婦の必要性を認識し、資金的な基盤をもち指導者を本国から呼んで教育プログラムを組んで実施している。1920年に聖路加高等看護学校が設立され、1927年には聖路加女子専門学校として、教育法制上も専門学校としての認可を受けてい

る。宣教師によるレベルの高い看護婦養成が行われた1920年代は、日本における看護制度としての内務省令看護婦規則（1915）が発令され、日本赤十字社を中心とする日本型の看護婦養成が定着してきた時期で、1880年代に先駆的なアメリカ女性宣教師による看護婦養成が試みられてから約40年後のことであった。

リード、ツルー、リチャーズらの先駆者たちの事業はトイスラーによって日本の地に結実されたと考えることもできるのである。

### 註

- 1) 1900年の「在日本基督教新教宣教会統計」によると米国宣教協会では32協会が日本で事業を開始しており、宣教師数は220名、宣教師の妻が191名、女性宣教師は183名となっている。本多繁：米国のプロテスタントイイズムと日本人，丸善仙台支店，222-223，1991.
- 2) 杉田暉道，長門谷洋治，平尾真智子，石原明：看護史（第6版），医学書院，1996.
- 3) 亀山美知子：日本近代看護の歴史Ⅲ（宗教と看護），ドメス出版，1985.
- 4) 平尾真智子・坪井良子：わが国最初の看護教育指導者ミス・リードの活動 —ニューヨーク婦人伝道局の年報を中心とした資料から，第23回日本看護学会（看護総合）集録，241-243,1992.
- 5) 高田みつ子：米国プレズビテリアンミッション往復書簡にみる桜井女学校，看護教育，27,7-10（連載），1986. 亀山美知子：日本における近代的看護婦の養成と合衆国長老教会のかかわりについて—一番町スクールを中心に—，看護展望，12,11-13,1（連載），1987-1988.
- 6) 小野尚香：リンダ・リチャーズの人と思想，保健婦雑誌，53,7-54-3，（連載），1997-1998.
- 7) 小檜山ルイ：アメリカ婦人宣教師，東京大学出版会，1993.
- 8) 松田誠：高木兼寛伝，講談社，1990.
- 9) “Annual Report of the Woman’s Foreign Missionary of Presbyterian Church Phiradelphia, 1885”（米国長老教会歴史資料館蔵）
- 10) 平尾他前掲書4），242.
- 11) グラハム・セミナリーは1874年にニューヨーク婦人伝道局のミス・ヤングマンが運営していた築地B6番にあった女学校を，1876年に資金5400ドルをもって築地新栄町42番に新校舎を拡張移転した女学校のことをいう。その名は主たる資金の投資者である同局会長ジュリア・グレアムの名を冠したものである。その後この経営はフィラデルフィアとシカゴとニューヨークの3つの婦人伝道局の共同経営となり名前も新栄女学校に変更された。しかしこの経営はスムーズに進まず1881年にフィラデルフィア傘下の女性宣教師が桜井女学校に移り，新栄女学校はニューヨーク婦人伝道局の単独経営になった。平尾他前掲書4），241.
- 12) 東京慈恵会医院教育所同窓会編：教育所年表，東京慈恵会医院恵和会報，第2号，1934.
- 13) 高木兼寛：明德会講話訓示，成医会月報，第405号，510，1915.
- 14) 看護婦教育所の建物は1885年7月10日に建築が開始され1886年1月20日に新築落成した。看護婦教育所は1885年10月に設立し，第1回見習い生13名を採用し，教育所落成後13名のなかから5名を生徒として採用している。東京慈恵会：慈恵看護教育百年史，慈恵看護教育百年史編集委員会，1984.
- 15) 派出看護が行われていたことを示すものとして，1885年12月11日に制定された派出看護婦送状の規則がある。
- 16) “Woman’s Work for Woman and Our Mission Field”日本語になおすと「女性のための女性の仕事とわたしたちの伝道地」となる。ニューヨークの婦人伝道局の機関誌「私たちの伝道地」とフィラデルフィア婦人伝道局の「女性のための女性の仕事」が合併し，全長老派婦人伝道局を代弁する機関誌として1885年にニューヨークで出版されたものである。前掲7），325。（米国長老教会歴史資料館蔵）
- 17) "Woman's Work for Woman and Our Mission Field", I, p.205, 1886.
- 18) “Woman’s Work for Woman and Our Mission Field”, II, p.154, 1887. 外国人女性医師は日本政府からの免状を得ていないかぎり開業できなかった。小檜山前掲書7），p.227.
- 19) 東京慈恵会医科大学百年史編集委員会：東京慈恵会医科大学百年史，東京慈恵会医科大学，167，544,1980.
- 20) シュライオック：近代医学の発達，294，平凡社，1974.
- 21) Annual Report of the Board of Freign Missions of the Presbyterian Church in the United States of

- America,1888 (米国長老教会歴史資料館蔵)
- 22) 田村直臣編：女子学院五十年史，口絵写真，女子学院，1928.
- 23) 小檜山前掲書7)，317.
- 24) リードは1888年長老教会に辞任届を提出し同年5月19日に帰国している“Japan Weekly Mail,May 26,1888.”.
- 25) LINDA RICHARDS:NURSING PROGRESS IN JAPAN, (「日本における看護の発展」) “The American Journal of Nursing” vol.2,no.7,pp.491-494,1902.
- 26) 平尾真智子：東京慈恵医院看護婦教育所の看護婦留学生について，医譚，第60号，3601-3608,1992.
- 27) 当時アメリカには10数校の看護学校があった。  
Robinson, V. : White Caps-The Story of Nursing,p.254, 1946. なかには短期の養成もあり，わが国最初の女子留学生の一人山川捨松の学んだコースはコネチカット看護学校の10週間の特別コースである。Farnam, W. : Address Prepared for the Graduation Exercises of the School, June 9,1926,The Connecticut Training School of Nurses.
- 28) 斬馬剣禅：東西両京の大学，三宅対高木 (9)，読売新聞，第9529号，1903,12月24日。高木は明治30年代の半ばからは仏教に強い関心をもつようになっている。松田誠前掲書8)，p.164.
- 29) 小檜山前掲書7)，pp.214-217.
- 30) 小林恵子：桜井女学校幼稚保育科の創立者M. T. ツル—日本で最初の保育者養成に関する一考察，国立音楽大学研究紀要，23，1989.
- 31) “Woman’ s Work for Woman and Our Mission Field”，II，pp.126-7,1887.
- 32) リンダ・リチャーズの回想記，第1章，看護実践の科学，1976年10月号，61-62.
- 33) Amy Marie Haddad: Ethical and Legal Issues in Home Health Care,23,Appleton & Lange,1991.
- 34) Allon Peeble他：Nursing Service and Insurance for Medical Care in Battleboro Vermont,p.47, Chicago Univ.Press,1932.
- 35) 前掲書31) pp126-7.
- 36) 平尾真智子：エジンバラ王立救貧院病院とアグネス・ベッチ，日本医史学雑誌，36,3,11-28,1990,参照.
- 37) 小檜山前掲書7)，317.
- 38) 田村えい：ミセス・ツル—の思い出，道，道会事務所発行，20-21，1957.
- 39) 篠田鉦三：日本看護婦の嚆矢，明治百話 (上)，岩波文庫，115，1996.
- 40) 看護学校の閉鎖。ジレスビーからライト医師とツル—にあてた手紙，1888.10.2 “Record of U.S.Presbyterian Missions:JAPAN LETTERS” (横浜開港資料館蔵)。理事会の意見は看護学校は病院がなければやっていけないというものであった。
- 41) ヘボンの反対。1888.4.2付ヘボン書簡。Record of U. S. Presbyterian Missions:JAPAN LETTERS. (横浜開港資料館蔵)。ヘボンの考えてたとおり，数年を待たずしてわが国での組織的な看護婦養成は日本赤十字社が行うようになった。
- 42) 小檜山前掲書7)，p.225.
- 43) 大浜徹也：女子学院の歴史，女子学院，250。1985。リードの再来日も考えられる。
- 44) 高田みつ子：米国プレスビテリアンミッション往復書簡にみる桜井女学校3—衛生園の設立と閉園に至るまで，看護教育，27，(9)，1986。参照。
- 45) ベリーの京都看病婦学校設立の演説。佐伯理一郎，京都看病婦学校五十年史，4-11，京都看病婦学校同窓会，1936.
- 46) リンダ・リチャーズの回想記，第6章，看護実践の科学，1978年5月号71-72.原本は“REMINISCENSES OF LINDA RICHARDS-AMERICA’ S FIRST TRAIND NURSE,WHICOMB &BARROWS,BOSTON, 1911.である。
- 47) 佐伯前掲書45) pp.26-27. ベリー氏の演説においても看病婦学校設立の目的の一つに「看護婦長の養成」がかかげられている。
- 48) 佐伯前掲書45)，p.30. 亀山前掲書3) のpp.95-114. 参照。
- 49) 前掲書25)，“The American Journal of Nursing” vol.2,no.7,pp.491-494,1902.
- 50) Nutting,M.A.& Dock,L.L.: History of Nursing. (4vols) , Putnam’s Sons,1907-1912. 第4巻は世界各国の看護歴史となっており，Japanの項目には，日本における最初の看護学校は1885年9月リンダ・リチャーズ嬢によって設立されたとなっている。
- 51) リンダ・リチャーズの回想録として註の32) ,46) にも引用した。この本は，看護実践の科学，1巻1号から3巻12号まで尾田葉子氏の訳で全文が連載されている。

- る。
- 52) 徳川早知子：京都看護婦学校卒業生の社会事業活動について—石井辰樹と児童福祉，第16回日本看護科学学会講演集，340-341，1996。
- 53) 平尾真智子：明治28年に看護婦が著した伝染病看護の本について，日本医史学会神奈川地方会第9回学術大会集録，11，1996。この本は田中定著，赤痢虎列刺看護法，明治28年，である。
- 54) 徳川早知子：Helen E. Fraserと成瀬四寿について，第21回日本看護学会（看護総合）集録，76-78，1990。
- 55) 小檜山ルイ：婦人宣教師の女子教育事業—その伝道事業における位置づけと成功の要因，キリスト教史学，第48集，72-73，1994。
- 56) 小檜山ルイ：19世紀アメリカの東アジア伝道，中国と日本における経験とイメージの形成，異文化交流と近代化—京都国際セミナー1996—，大空社，50，1998。日本におけるプロテスタント宣教師の活動は大きく次の3期に分けて考えられる。第1期は準備期で1859年からキリスト教禁令の高札が下される1873年まで，第2期は発展期から最盛期に一気に登りつめる1873年から1890の教育勅語の発布まで，第3期は1890年以降の停滞期となる。
- 57) 小檜山，前掲書56)，53。
- 58) 厚生省医務局編：医制百年史，ぎょうせい，1976。第3節医療制度の第1項医療関係者，61-95，参照。
- 59) 1880年代においては学校制度の枠組みそのものが明確ではなく，その後専門学校，中学校などに発展していく学校も各種学校として位置づけられており，この時期の各種学校をその後の各種学校と同じに考えるわけにはいかない部分もある。しかし看護婦学校の場合は各種学校から段階的に専門学校に発展していったのは戦前期には聖路加高等看護学校1校のみで，あとはすべて各種学校のままであった。
- 60) 創立70周年記念誌編集企画委員会編：聖路加看護大学の七十年，聖路加看護大学，1992。

## The Beginnings of Nurse Training in Japan and the Role of American Women Missionaries, with particular reference to the activities of Miss Reade, Mrs. True, and Miss Richards

HIRAO Machiko

### Abstract

Three American women's missionaries, Miss Reade, Mrs. True and Miss Richards, were involved in nurse training in Japan in the 1880s. In an analysis of their activities, this paper researches their role and significance in the history of the training of Japanese nurses, based upon their letters to their sponsors in America, the reports in the missionary organs and the Annual reports of the Missionary Board.

The analysis shows that their training of nurses was ground breaking in Japan, and Japanese people accepted the need for nurse training. Their graduates were successful, but the training itself was not widely diffused. Of course, from the missionaries' point of view, nurse training was not their primary purpose and from the Japanese side, the Meiji government wished to retain Japanese control of the medical system and medical work. Unlike the cases of physicians or midwives, the government training system for nurses still did not exist in the 1880s. Thus it was that missionaries could enter the field of nurse training. Several years later, however the standard and systematic training in Japan was begun by the Japanese Red Cross in 1890.

These missionaries were forerunners, but nurse training by missionaries did not take root in Japan.

**Key words:** the history of nursing, the history of nursing education, the history of nursing crossover in Japan and America